

研究ノート

埋葬方位研究の今とこれから

白 川 美 冬

## 研究ノート

# 埋葬方位研究の今とこれから

白 川 美 冬

**要旨** 研究成果の蓄積と研究領域の細分化が顕著な埋葬方位研究では、学史の体系的把握が積年の課題であった。そこで本稿では、先史・原史時代を対象とした埋葬方位研究を整理し、現時点での課題を点検した。その結果、通時的視座と客観的根拠を提示した景観分析の導入が課題であることがわかった。今後の埋葬方位研究は、周辺景観や自然環境と人間の営みを通時的に把握し、民俗方位と呼称される方位概念の実態把握を行いながら、造墓時の方位規範とそこに投影された価値観を再考する必要がある。

**キーワード** 先史・原史時代、学史整理、埋葬、葬制、方位

### はじめに

生者が死者を弔うとき、何らかの儀式や非合理的にもみえる演出が盛り込まれ、埋葬施設には生前の被葬者を象徴する要素や、被葬者や葬送祭祀を執り行う集団の価値観が反映される。そのため精神文化や社会構造を把握する手段として、墓制研究は重視されてきた。なかでも埋葬施設に関連する方位の研究は、19世紀に開始されて以降、被葬者の諸属性すなわち信仰、出自、階層、年齢、性別などを知る手段として有望視され続けてきた。しかし、研究成果の蓄積と研究領域の細分化は、埋葬方位研究の通時的かつ広域的な把握を困難にした。そのため先達が残した研究の軌跡を系統立てて理解しえないのが現状である。

そこで本稿では、筆者が収集した先史・原史時代の埋葬方位研究262件を対象に、各論考が公表された時系列に沿って論点を整理し、埋葬方位研究の課題と展望を論じる。

## 1 埋葬方位研究の歴史

### (1) 1890～1920年代：埋葬方位研究の萌芽

日本での埋葬方位研究は1890年代に遡る。その先駆的研究者がウィリアム・ゴウランド (William Gowland) である。明治政府に造幣技師として招聘された彼は、各地の横穴式石室の実地調査を行い、石室開口部が南面する要因を太陽崇拜に求めた (Gowland 1897)。ただし、この成果は英国側で公表されたため、日本の研究者に影響を与えたか否かは不明である。

日本側で研究が開始されたのは大正年間のことである。日本人種の解明を希求した人類学者らが墓制研究を進展させる方向へといざなった。こうした情勢下、長谷部言人の論考が提出される。長谷部は岡山県津雲貝塚などを例に、太陽光による死者の蘇生を回避するため東頭位が選択されたと論じた (長谷部1920)。これが埋葬頭位の意義を積極的に評価した初の論考である。

同年には大串菊太郎や清野謙次も東頭位と天体崇拜を関連づけた（大串1920，清野1920a）<sup>1)</sup>。

彼らが埋葬頭位を精神文化の反映と捉えた一方、その規定要因を地形条件に求めたのが小金井良精である（小金井1923）。これを機に埋葬方位に対する研究者の立ち位置は、人間の精神性の介在を積極的に認める立場と消極的に捉える立場とに分岐していく。

## (2) 1930年代：考古学への波及と受容

この頃、考古学の側で埋葬方位を扱う研究者も出現した。なかでも墳丘主軸を基礎に群馬県白石古墳群の変遷を論じた後藤守一の仕事は特筆される。後藤は古墳群の変遷を、丘陵や台地上に築造され墳丘軸線が地形条件に支配された第一様式、平地上に営まれ集落に向けて築造された第二様式、墳丘主軸を東西に向け横穴式石室の開口部を南面させた第三様式に区分し、前方部の方向が築造時期の指標となりうることを示唆した（後藤1935）。

その一方、山内清男は埋葬方位に人間の意志の介在を認めない立場をとる。山内は岡山県津雲貝塚の埋葬人骨が若干の間隔をあけて埋葬されたことから、縄文時代の墓地は森林に形成され、人骨の配置が立木の配置に規定されたとの仮説を打ち出した（山内1936）。

## (3) 1940年代：太陽信仰説の台頭

この時期の埋葬方位研究には、日本が天皇制を神聖視した当時の情勢との親和性が認められる。たとえば鏡山猛は、弥生時代の箱式石棺が東西方向に配された要因を、太陽信仰に基づく再生思想や死生観に求め、南北方向を太陽への禁忌的観念が反映された意味を持たない方位と解釈した（鏡山1942）。ゴーランドの見解に対する初の批判的知見である。また、清野謙次は石器時代の太陽崇拜が日神崇拜として継承されたと指摘する（清野1946・1949）。人類学者として大東亜共栄圏建設に尽力した清野は、戦後も国粋主義的な立場を貫いたらしい（春成2003）。

一方、三宅宗悦と八幡一郎は埋葬頭位が地形条件に規定されたとの立場をとる（三宅1940，八幡1940）。注目すべきは両者による先行研究の扱い方にある。太陽信仰説に触れつつ地形規定説を論じた三宅に対し、八幡はそうした議論に一切触れることなく論を終えている。当時の情勢を鑑みれば、太陽信仰への直接的な批判が憚られる状態にあり、科学的な歴史学の構築を目指す八幡は、無言の抵抗として非関与を貫いたのかもしれない。

## (4) 1950年代：実証史学の本格的始動

戦後復興期、北海道モヨロ貝塚の発掘調査が行われた。兒玉作左衛門はモヨロ貝塚の埋葬頭位が河川と反対側の西北方向に置かれたことを指摘し、頭位を海から背けるエスキモーの習俗との関連を指摘する（兒玉1948）。そして西北以外の事例が何らかの信仰的意義を有すると考え、アイヌ民族が不慮の死を遂げた人物に行う、祟り避けの習俗との関連を指摘した（兒玉1950）<sup>2)</sup>。

戦後の日本考古学では、国家至上主義的な歴史観からの脱却が喫緊の課題であり、唯物論的歴史観が急速に受容された。学界全体が実証主義的な研究手法を積極的に導入した結果、いわゆる感覚派の解釈主義者や在野のアマチュア考古学者の学説が注目されることはなかった<sup>3)</sup>。

実証的に古代史を再構築する姿勢は、古墳時代の研究者にもみられる。末永雅雄は奈良県馬見古墳群では丘陵の傾斜変換線に墳丘軸線を直交ないし平行させた事例が多いことを発見し、生産域への執着が高所への築造を促したと指摘する（末永1951）。この研究を発展させたのが斎藤忠である。前方後円墳の前方部は地形条件を問わず一定数が南を向くため、特定方位を志向する価値観が古墳時代には存在し、墓所の選定段階から特定方位が意識された可能性を論じ

た(斎藤1953)。概括的理解ではあるが、地形規定説を実証的に批判した画期的論考である。

#### (5) 1960年代：方位研究の発展

高度経済成長に伴う発掘調査数の増加は埋葬方位研究をひとつの研究領域として確立させた<sup>4)</sup>。この情勢下、北海道の縄文葬制研究を牽引したのが藤本英夫である。藤本は北海道静内御殿山遺跡の埋葬頭位の傾向をもとに、土器の分布圏と埋葬頭位の対応関係を導いた(藤本1963)。

土器と頭位の対応関係をより広範囲に押し広げたのが大塚和義である。大塚は北海道から東北北部の事例を、頭位に統一性のない第Ⅰ段階(縄文早期から中期)、環状列石の分布域で西北頭位が採用された第Ⅱ段階(縄文中期から後期)、西北頭位に東南頭位が加わる第Ⅲ段階(縄文晩期)に区分する(大塚1967)。そして第Ⅱ段階の出現を天体運行への意識と関連づけ、第Ⅲ段階の出現をサケマス漁など共同体の構成員が協業する環境下で生じた共同体規制の強化に求めた。

一方、大塚の解釈に異議を唱えたのが渡辺誠である(渡辺1969)。論中、渡辺は地形条件や抜歯習俗の有無を踏まえた埋葬方位研究の必要性を強調している。埋葬方位と抜歯の対応関係を示唆した論考は、おそらくこれが初発である。

多様な方位論が展開されるなか、原田大六が福岡県平原遺跡の論考を提出する。平原1号墓の主体部と鳥居が、朝の陽光が差し込む日向峠を向き、八咫鏡と思しき大型内行花文鏡が出土したことから、太陽信仰の存在を主張し伊都国女王を大日靈貴と比定した(原田1966)。だが日本神話の骨格に史実の反映をみた原田の説は、脱皇国史観を目指す考古学者から拒絶された<sup>5)</sup>。

方位の規定要因を巡る議論は古墳時代研究でも活発化した。小林行雄は古相の舶載三角縁神獸鏡を副葬する前期前半には墳丘主軸と竪穴式石室が直交し、新相の仿製三角縁神獸鏡などを副葬する前期後半には平行することを指摘し、編年研究の新たな指標を提示している(小林・近藤1964)。また末永雅雄が矢印を用いた方位の視覚化を試みたのもこの頃であった(末永1961)。

#### (6) 1970年代：多様な縄文方位論

三者三様の方位論が展開されるなか、藤本英夫の『北の墓』(1971)が刊行される。御殿山遺跡の埋葬頭位と二至二分の関係を図化し、太陽を指標とする葬送習俗の存在を確証した藤本は、近世アイヌの死生観をもとに、埋葬頭位が他界の方角を暗示すると主張した(藤本1971)。

この仮説に批判を加えたのが林謙作である。単一方向への頭位規制を疑問視した林は、縄文時代の東北では埋葬頭位が主方向と副方向に二分されることを根拠に、出自や成員権を区分する複方向頭位規制の存在を想定する(林1977a)<sup>6)</sup>。そして抜歯と埋葬頭位の対応関係から、埋葬方位に生前の社会的位置付けが反映されたことを重視し、埋葬頭位を精神文化や埋葬習俗の問題として矮小化する行為を批判した(林1977b)。抜歯と埋葬頭位から縄文社会を復元する研究視座は春成秀爾を中心に継承されていく(春成1979など)。

この頃、停滞気味だった弥生時代の方位研究も進展をみせる(石野1973)。なかでも埋葬方位から弥生社会の復元を試みた甲元眞之の仕事は特筆に値する。山口県中の浜遺跡の主体部が、東西と南北に4対1の割合で区分され、前者にのみ小児墓が伴うことを発見した甲元は、民族誌を参照しつつ、前者をムラ出身者、後者を別のムラからの移入者と判断した(甲元1977)。

一方、古墳研究者は政治関係の解明に舵を切りつつあった。その主導者が都出比呂志である。近畿地方における前期古墳の埋葬頭位に着目した都出は、北頭位埋葬を前期古墳の典型的要素に位置付けた斎藤忠の説を追認し、政治関係の変容が新相の葬送祭祀の創出に繋がったと論じ

た(斎藤1976, 都出1979)。前方後円墳出現期の社会を埋葬施設や副葬品などから多角的に復元した都出の古墳時代研究は、多くの研究者に埋葬頭位研究の有用性を認識させた。

#### (7) 1980年代：古墳方位ブームの到来

埋葬方位を記載する報告書が増加した頃、縄文研究者の間では頭位方向の違いを社会組織の差と捉える基本姿勢が定着した(林1980)。たとえば春成秀爾は、宮城県青島遺跡の埋葬頭位や抜歯型式などに相関関係を見出し、集団出身者と婚入者を推定した(春成1982)。また小林達雄は秋田県湯出野遺跡の土壙墓が東西と南北に二分されることから、太陽の運行に基づく方位観念の存在を指摘し、この二項対立関係を双分原理の反映と捉えた(小林1988)<sup>7)</sup>。頭位の差を出自に求める研究は、一部で批判を受けつつ、別の時代の研究者にも影響を与えた(辻村1983)<sup>8)</sup>。

数多の研究者が埋葬頭位の規定要因を模索するなか、福島県三貫地貝塚の埋葬頭位が鹿狼山山頂を向く事実が報告された(森1988)。民俗学者の佐々木長生は、鹿狼山が始祖や祖霊を祀る霊地であったと推察した(佐々木1988)。埋葬頭位から山中他界に迫った論考はこれが初出である。

一方、古墳時代研究では政治関係を把握する手段として埋葬方位が脚光を浴び、前期古墳を中心に埋葬方位ブームが巻き起こった。この立役者である都出比呂志は、前期古墳に特徴的な北枕埋葬を儒教思想の「生者南面、死者北面」の導入と捉えている(都出1986など)。また埋葬方位の地域差や墳丘軸線と主体部の平行直交関係も次々明らかとなった(岩崎1983など)<sup>9)10)</sup>。

#### (8) 1990年代：方位研究の成熟

この頃、埋葬方位研究は成熟期を迎える。縄文研究者の間では、頭位の規定要因を出自、性差、年齢、死因に求めることが主流となり、社会構造を復元する一手段として機能していた(堀越1991など)。また景観分析を行った論考も数多く公表されている(小林1993など)<sup>11)</sup>。

埋葬方位の差異を出自や性差に求めた研究は弥生時代にもある(池淵1994, 山田1994)。だが頭位から社会構造に迫る研究は少なく、むしろ地形と墓壙の平行直交関係などから、遺構の新旧関係や古墳時代との連続性ないし断絶性を解明することに重きが置かれた(亀山1994)<sup>12)</sup>。

古墳研究者は依然として被葬者の政治関係や階層を重視していた。だが支配・被支配体制を再考する機運が高まると、地域の自律性を重視する研究も増加し始めた(北條1999など)。また『前方後円墳集成』(近藤編1991)が刊行され、方位傾向の抽出が容易化すると多角的な研究も開始された。たとえば尾根筋の高低や水系の流路方向と前方部の関係を点検した論考がある(吉水1991, 田中1996など)。こうした諸氏の論考は景観分析の有用性を示す契機となった。

#### (9) 2000年代：本格化する景観分析

調査成果の蓄積は、なかば定説化した出自規定説の再考を可能にした(西澤2005)。なかでも山田康弘は頭位と抜歯や頭蓋形態小変異の対応関係を再整理し、両者に相関関係がないことを導く(山田2004)。そして縄文時代の埋葬頭位が、遺跡周辺のランドマークや地形、遺跡間の相対的な位置関係、年齢など、多様なあり方を示すと結論づけた(山田2003)。また景観分析から方位の規定理念を解明する試みも継続して行われた(大工原・関根2001など)。

この頃、弥生時代の埋葬方位研究は下火となり、埋葬方位を合理的に理解する動きが強まった。被葬者の配置関係と頭位方向が一定に保たれた要因を、死亡時期の集中に求めた藤田等の論考はその一例である(藤田2005)。また、地形規定説も再燃し始めた(内藤2003など)。

地形条件を重視する研究姿勢は古墳研究者にもみられる(片桐2002など)。古墳築造時の合理

性を重視したとき、この理解に帰結するのは当然であろう。加えて政治史的な議論も引き続き行われていた（原田・松山2000など）。停滞するかに思えた古墳方位研究であったが、方位と地形の関係を具体的に算出した統計学的研究も開始された（西ほか2003）。また GIS 技術の進展は古墳の配置関係や周辺景観を組み込んだ方位論の展開を可能にした（北條2003など）。

#### (10) 2010年代：考古天文学の本格的始動

縄文時代や弥生時代の埋葬方位研究は停滞し、埋葬方位を扱う研究者も減少する（山田2010など）。その一方で、古墳研究者は方位の規定要因を模索し続けており、政治史的・景観論的な理解はもとより、古墳の視覚的効果を重視した説も提出された（福永2011など）<sup>13)14)</sup>。また、徳島県萩原墳墓群や愛知県東之宮古墳の埋葬方位が太陽の出没位置と重なる事実が報告されたのもこの時期である（菅原2010、赤塚2014）<sup>15)</sup>。諸氏の論考に触発された北條芳隆は、埋葬方位と過去の天体運行や周辺景観との関係を厳密に点検し始めた（北條2017など）。

#### (11) 2020年代～現在：視認性の追求

景観分析の有用性が認知されはじめた結果、景観論的研究が活発化した（赤塚2020など）。この議論から派生したのが、前期前方後円（方）墳を対象とした視認性の問題である。滝沢誠や筆者は水上交通路からの視認性が古墳築造時に重視された可能性を指摘する（滝沢2020、白川2022）<sup>16)</sup>。また河野一隆は西日を取り込む演出が一部の装飾古墳に導入されたと指摘した（河野2022）。こうして古墳方位研究は古代人の視点に立脚した議論が展開されはじめ現在に至る<sup>17)</sup>。

## 2 埋葬方位研究の動向

以上、埋葬方位研究のあゆみを振り返ってきた。ここからは埋葬方位の規定要因を論じた219件の文献を対象に、研究視座から学史の再整理を試みる。

### (1) 時代別の研究視座

図1が示すとおり研究対象となる時代には偏りがある<sup>18)</sup>。古墳時代を対象とした論考が圧倒的に多く、縄文時代がそれに後続するが、弥生時代を論じた研究は非常に少ない。これは通時的把握を困難にさせる作用をもたらす。この事実関係を踏まえ、以下の四つの研究視座に即しながら各時代の学史を再整理したい。

自然環境…天体運行を含む周辺景観や地形との関係に注目した研究。

社会環境…埋葬行為と個人的性格との関係に注目した研究。

宗教観念…宗教的な観念体系との関係に注目した研究。

地域時期…文化や交流圏を把握する研究指標としての有用性に注目した研究。

なお、研究視座は複数回答を可能とし、上記区分に該当しない文献については除外した。

#### ① 縄文時代の埋葬方位研究

縄文時代の埋葬方位研究は1980年代から2000年代に活発化し、2010年代から現在まで下降傾向にある（図1）。縄文時代の研究視座を年代別に整理した図2によると、1980年代から2000年代にかけて論考数が増加した要因は、自然環境論と社会環境論の増加にある。学史的背景を踏まえても、埋葬頭位から社会構造の復元を試みた林謙作や、遺跡の周辺景観を加味した小林達雄の研究が多く研究者に影響を与えたことは明白である。

また2010年代から現在まで埋葬頭位に関する議論が低調となった背景には、山田康弘の先行

埋葬方位研究の今とこれから

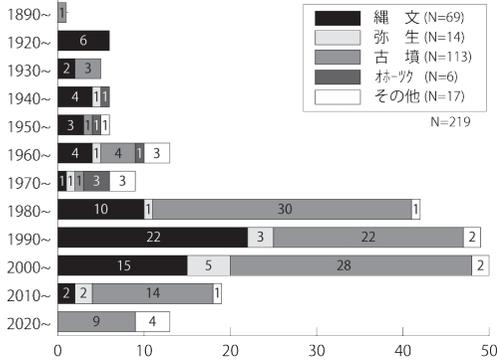


図1 埋葬方位研究における時代別の様相

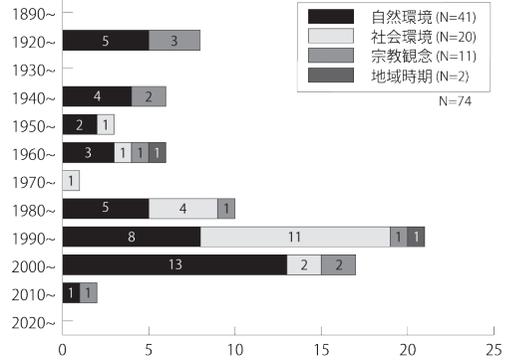


図2 縄文時代の研究視座

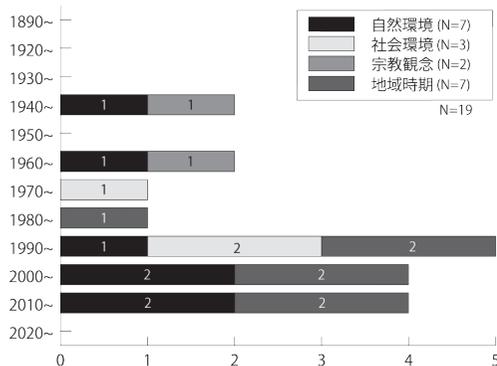


図3 弥生時代の研究視座

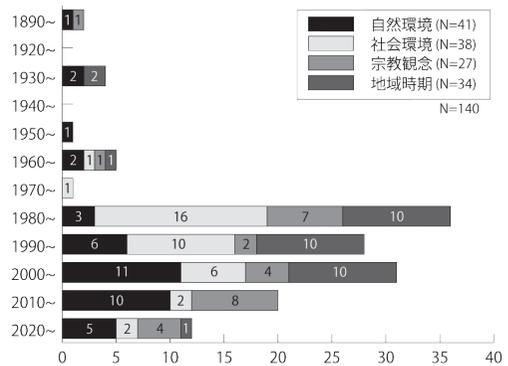


図4 古墳時代の研究視座

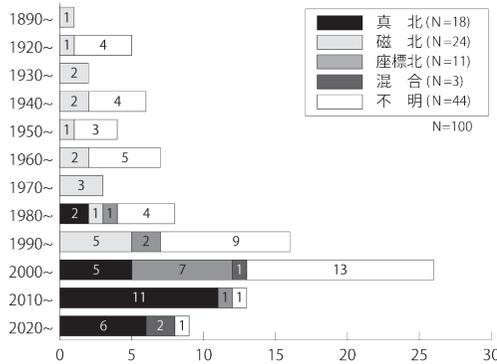


図5 自然環境論における北の概念

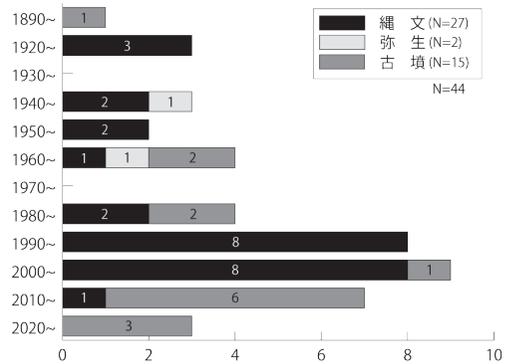


図6 太陽に関連させた論考

研究批判が影響したと推測される(山田2003など)。被葬者の身体的特徴から出自規定説を批判的に検証した山田の論考は、埋葬方位の規定要因を推定する難しさや、埋葬方位のみを扱うことの危険性を周知させた。この影響も相まって埋葬方位研究は下火になったのではなかろうか。

② 弥生時代の埋葬方位研究

弥生時代の埋葬方位研究は単発的かつ局地的に行われてきた(図1)。母数は少ないが、埋葬方位の意義を自然環境や地域時期に求めた研究が多い(図3)。上述したように自然環境論では

1960年代まで太陽規定説が提唱されてきた。だがこの研究視座は継承されず、それ以降は地形規定説のみが論じられている。北近畿などで顕著な地形に沿った事例の蓄積と、記紀神話への忌避姿勢が影響しているのだろうか。また地域時期論の存在は、弥生時代の埋葬方位論が各時代との連続性や断絶性を知る手段として機能したことを意味する。

では弥生時代の埋葬方位研究はなぜ少ないのか。従来、弥生時代の墓制論は北部九州を中心に展開されてきた。とくに弥生中期に急増する甕棺墓は北部九州を特徴づける一要素である。だが甕棺墓の軸線方向を扱う議論は少なく、遺構相互の配置関係が重視された<sup>19)</sup>。甕棺墓の研究では、弥生中期初頭から前半に営まれる二列埋葬墓地から、弥生中期後半に出現する集塊状墓地への変遷を、唯物史観的な視点で語ることが主流だった(高倉1973)<sup>20)21)</sup>。配置関係から階層化の道筋を明示し、のちの階層構造や階級形成を解明することが重視された結果であろう。

加えて弥生時代の墓制は地域的特色が著しく、甕棺墓や方形周溝墓など様々な墓が各地で採用された。関東地方では弥生中期まで再葬墓が主流であり、方位の抽出自体が困難な状況にあった。この多様な墓制が地域間比較を困難にさせ、方位研究の充実を妨げたのだと推測される。

### ③ 古墳時代の埋葬方位研究

古墳方位研究は1980年代から急増した。この背後には弥生時代と対照的な墓制のあり方がある。古墳時代には画一的な墳墓が広範囲に分布し、埋葬姿勢も伸展葬に一律化する。この斉一的な墓制の誕生と波及が、政治史的議論を活発化させ埋葬方位研究を充実させた。事実、1980年代以降は政治史的理解とそれを補う地域的・編年的な傾向の把握が重視されていた(図4)。

また、古墳時代においても自然環境論が最多となる。前述のとおり古墳方位研究は前期古墳を中心に展開されてきた。前期古墳の大半は高所へ築造されるため、地形条件が墳丘軸線を規定したと考える研究者も多い。そのため1990年代から2000年代の自然環境論は大半が地形的要因を重視し、それを裏付ける資料の蓄積も相まって景観論的研究は2010年代から本格化した。

なお、ここでひとつの疑問が生じる。1877年から1965年までに刊行された古墳の報告書数を見る限り、検討に耐えうるほどの本数が刊行されている(北條2011)。十分な資料数があるにもかかわらず、なぜ1970年代以前は埋葬方位への関心が乏しかったのだろうか。

戦後、日本考古学では記紀神話に依拠した学問構造からの脱却が事実上の至上命題となり、考古学独自の客観的な方法論である編年研究が重視されていた。かつて小林行雄が鏡の新旧関係を軸に埋葬方位の変遷を論じたように、古墳時代の埋葬方位研究は考古資料に基づく編年研究の確立を待つ必要があったと推測される(小林・近藤1964)。

### (2) 研究視座の全体的傾向

各時代の共通項は自然環境と埋葬方位を関連づけた論考が多い点にある。自然環境論は埋葬方位の規定要因を社会環境や宗教観念に求めるよりも遥かに合理的であり蓋然性も高い。そのため地形条件や周辺景観に触れた議論の累積は、客観的な研究成果の蓄積にもみえる。だが先に結論を述べると、埋葬方位と自然環境の関係を科学的に点検した研究は限定的であり、研究者の感覚的ないし直観的な部分に依拠した議論が大半を占める。

自然環境論を実証的に論ずるためには、三種類の北の基準を知る必要がある。それが真北(True North, T.N.)、磁北(Magnetic North, M.N.)、座標北(Grid North, G.N.)である。真北はその地点と北極を結ぶ子午線の方向、磁北は方位磁石のN極が指す方向、座標北とは地図

上の方眼縦軸の上方向を意味する。このうち一般的に北と認識されているのが真北である。真北を基準とした場合、磁北は5°から11°西偏し、座標北は座標原点からの東西距離に応じて1°未満のズレが生じる。そのため立地条件や周辺景観の点検には、地図上の北への統一化すなわち真北への補正作業が必須となる<sup>22)</sup>。

だが、こうした差異は重視されてこなかった。図5は自然環境論で使用された北の概念を真北・磁北・座標北・混合・不明に大別したものである<sup>23)</sup>。北の定義が統一されていないどころか、北の基準を明記しないものが圧倒的に多い。真北を採用した論考は1980年代まで存在せず、その数も全体の2割しかない。客観的根拠の不足は論理の破綻ないし飛躍を意味するから、考古学者の多くが懐疑的眼差しを向けるのも無理はない。

自然環境論のなかで最も疑似科学的な扱いを受けてきたのが太陽規定説である。1986年の段階で佐合勉らの研究グループは地球の歳差運動や黄道傾斜角の経年減少を考慮した実証的な景観分析を実施している(Sago et al. 1986)<sup>24)</sup>。だが、これら天体現象を加味した景観論的研究が考古学側で開始されたのは2010年代以降のことであり、それ以前は主観的理解に基づく議論や、過去の天体運行を無視した現地観測データを基に論を組み立てたものであった<sup>25)26)</sup>。非科学的な議論は実証主義を主張する戦後考古学の風潮と相反するものであり、考古学者に拒絶反応を抱かせたのも無理はない。

また、埋葬方位と太陽を関連づけた論考を整理したものが図6である。縄文時代の論考が一定数存在するのに対し、弥生時代の議論はほぼなく、古墳時代の論考は2010年代から急増する。前述したように、前期古墳は尾根筋上に築造されることが多く、墳丘軸線の規定要因を地形的制約に求める合理的理解が一般的であった。加えて奈良盆地の大和東南部古墳群(北條2017c)を俯瞰すると一見乱雑な方位選択にもみえる。こうした様相が、墳丘軸線の設定に意思の介入を認める景観論的研究の導入を遅らせたのだと推察される。

このほかに想定されるのが、日本考古学における戦後の共通認識である。戦後考古学の発展は、天皇制絶対主義に伴う皇国史観からの脱却が原動力にあった。とくに皇祖神・天照大御神は太陽のイメージと直結するため、考古学のなかに太陽を組み込むこと自体が、非科学的研究に傾倒する危険性をも孕んでいた。だとすれば日本神話に対する戦後の共通認識が、皇紀に抵触する可能性がある弥生時代や古墳時代の研究から太陽への視座を阻害したのかもしれない<sup>27)</sup>。

### 3 埋葬方位研究の課題

#### (1) 課題①：通時的視座の導入

各時代の研究動向を整理してきた。時代別の様相をみたとき、弥生時代を対象とした埋葬方位研究の少なさに目がいく。通時的視座の不足は共時的視座の偏重と同義であり、長期的に保有された価値観や方位規範は存在しないことを前提に議論が展開されたかのように映る。

一般に新たな墓制の採用は異なる価値観の創出や受容と想定されてきた。だが現代人の抱く北枕への忌避性が、古墳時代より踏襲された方位観念である可能性も完全には捨てきれないことも事実である<sup>28)</sup>。これは研究者が規定した時間軸上で、外表施設の共通性だけに着目しては、人間の認知的側面を把握しきれないことを意味する。時代区分の断絶を価値観の更新と捉える理解の妥当性を吟味するためにも、通時的眼差しで埋葬方位を再考する必要がある。

## (2) 課題②：客観的な景観分析の実施

景観論の研究では客観的根拠が不足しており懐疑的眼差しが向けられてきた。だが技術的問題が解決し、現象面を実証的に捉えることが可能になった今、景観分析を加味した方位基準や価値観念の精査が必要となる。

客観的根拠に基づく景観分析の実施には、北の概念の統一が不可欠となる。先史・原史時代人が真北を意識したか否かが問題なのではない。あくまでも客観的な分析を担保するために必要な前提なのである。北の基準の選択と表記の有無が報告者の選択に委ねられている現状は、発掘調査報告書の執筆にも敷衍され、景観分析の進展を阻害する要因となるため早急に改善する必要がある。統一的な北の基準を規定せず埋葬方位研究を継続することは議論の信憑性を低下させ、非科学的な地位に甘んじることに繋がりがかねない。

北の概念の統一が議論の遡上にあがらなかった背景には、原始的で牧歌的な生活を営んだ人々が、厳密な方位を意識したはずがないという、現代人ならではの与見があるのかもしれない。また在地的な民間信仰に対する関心の低さや、超常現象や疑似科学に対する疑心も、この判断を後押ししているのだろう。いずれにせよ潜在的なバイアスが関係していることに疑う余地はない。多角的な検討が可能となった以上、新たな知見を獲得する契機を逃さぬためにも、様々な自然環境下で育まれた方位観念をpushし、そこに反映された価値観念を丁寧に紐解く必要がある。

### おわりに — 民俗方位への止揚 —

以上、先史・原史時代の埋葬方位研究を整理し、課題と展望を論じてきた。その結果、埋葬方位研究では、弥生時代を扱う議論や客観的根拠を提示した景観論の研究が不足していることが判明した。そのため埋葬方位研究には通時的把握と景観分析の導入が不可欠だといえる。

民俗学者や人類学者いわく、東西南北の方位概念が存在する以前の古代社会では、周辺景観に在地文化を適応させた、特定範囲でのみ通用する感覚的・認知的な方位観念「民俗方位」が形成されていたという（倉田1972など）。そしてそこには、在地的な信仰や習俗が反映される。

民俗方位には、地域固有の自然環境に依拠した特殊な方位観念はもちろんのこと、天体運行に基づく普遍的な方位観念も含まれる。太陽の出没に相当する言葉は、東西を表現する原始的な表現形式として採用されることが多い（水野1978）。つまり景観論の視点を導入した通時的な研究すなわち「景観史研究」は在地的な方位観念や価値観念を紐解く有用な手段となりうる。

抽象的思考を有する人類がその能力を遺憾なく発揮する場の一つが墓所であることは言うまでもない。山岳に囲まれた小宇宙が点在する彼の地で、豊かな感性と多様な信仰観を育んだ人々が何の基準も設けずに墓を掘ったとは到底思えない。むしろ社会的、宗教的、集団的な制約のもとで、何らかの指標を基準に方位を規定したと考えるべきではなかろうか。この仮説を批判的に検証するためにも、通時的視座で客観的根拠を提示した埋葬方位研究が必要となる。

### 付記

本論は2023年1月に東海大学大学院に提出した修士論文の一部であり、第5回考古天文学会議と東海大学史学会11月例会にて発表した成果が含まれている。謝辞は紙幅の都合上、省略することをお許しいただきたい。

註

- 1) 清野謙次は頭位方向に認められる規則性の有無を文化の高低差と捉え発展段階的な理解を示した(清野1920b)。
- 2) 中山英司は愛知県吉胡貝塚の報告書で、日々変動する太陽の出現位置に埋葬頭位が規定された可能性に言及している(中山1952)。埋葬頭位の方位から被葬者の死亡時期ないし埋葬時期に迫った初の論考として注目される。
- 3) 過去の歳差現象を考慮し、秋田県万座・野中堂環状列石と夏至の対応関係を論じた在野の研究者・川口重一には冷淡な眼差しが向けられたらしい(川口1956, 小倉2002)。
- 4) 埋葬頭位に性差の反映をみた向坂鋼二の報告、埋葬頭位の共通性からオホーツク人を樺太・道東・千島アイヌの直接的先祖とした藤本強の説がある(向坂1962, 藤本1965)。
- 5) 平原遺跡の特異性が再評価された今日では、平原遺跡と太陽運行の関係を指摘する研究者もいる(柳田2000など)。
- 6) 林の先行研究批判は、他の埋葬方位研究にも展開された(林1977c)。頭位の規定要因を地形条件に求めた説に対しては、頭位に選択の余地があったと指摘した(林1977b)。
- 7) 過去の天体運行と周辺景観を組み込んだ研究も、物理学者によって開始された(Sago et al. 1986)。
- 8) 林謙作は頭位の双分原理が縄文時代後期中葉に後退すると論じ、都出比呂志は弥生時代の方形周溝墓への出自規定説の援用を危険視した(林1980, 都出1986b)。また田中良之は人骨の遺伝情報の把握が出自の把握に必要なだと指摘した(田中1998)。
- 9) たとえば徳島県と香川県における前期古墳の埋葬頭位は東西方向が採用された(天羽1986など)。
- 10) 富山県谷内16号墳には前方部と異なる位置に墓道がある。墓道と主体部は直交し、前方部と主体部が斜交する。この配置関係を意識的な営為と捉えた論考が斜交原則を積極的に評価した初の論考である(宇野1988, 春日1988)。
- 11) 秋田県大湯環状列石と太陽の関係が再考され、磁気偏角を用いた補正作業の重要性が週上にあがった(柳沢1999)。
- 12) 円形周溝墓主体の地域では平行直交原則がなく、古墳時代に斜交原則が導入されたとの指摘もある(福永1990)。
- 13) 滝沢誠は縦向型前方後円墳などの前方部短小タイプには斜交埋葬事例が多く、墳丘軸線への関心が薄いことを根拠に、古墳中期以降に認められる従属的性格が、古墳時代の初現段階まで遡ることを指摘している(滝沢2012)。
- 14) 富士山の噴火活動が活発な時期に、埋葬方位を富士山へと向ける事例が存在し、それが富士山信仰の素地となったと捉えた北條芳隆の説は、災害景観に対する人間の認知的側面に迫る論考として評価される(北條2017など)。
- 15) 菅原康夫は萩原墳墓群の石囲壁と木棺主軸のズレを築造時期の差と理解した(菅原2010)。
- 16) 筆者は視認性の高い前期前方後方墳の場合、古墳築造時に動員された労働人数も多いと推計されることから、古墳築造を介した権威者間や集落間の政治関係の拡大強化が、水辺と墳丘軸線が平行する要因だと捉えた(白川2022)。
- 17) 情報処理技術や位置情報技術が飛躍的な発展を遂げ、地域を超えた分析が可能となった(Baratta et al. 2022)。
- 18) 複数の時代を論じた文献はその他に区分した。
- 19) 甕棺墓の軸線方向を扱った論考は、筆者が把握する限り、鏡山猛の論考しかない。鏡山は福岡県秋成遺跡と同県小田

- 遺跡を例示し、双方が東西方向を向くことから、太陽信仰との関係を論じた(鏡山1942)。
- 20) 溝口孝司はコミュニケーションという観点で二列埋葬墓地から集塊状墓地の転換を理解している(溝口1995)。
- 21) 甕棺墓の方位研究が希薄なのは、発掘調査現場での心証や図面整理の際の直観的な心証も影響したと思われる。
- 22) 三者の違いを認識したうえで、磁北・真北・座標北を同列に扱う研究者もいる(杉井2003)。
- 23) 1970年代以前の発掘調査は大半が磁北であるため、1970年代以前の論考は、特段の断りがない限り磁北と解釈した。具体的数値やグラフが提示されていない論考については不明に区分した。
- 24) 歳差運動は地球の自転軸のコマ振り運動を指す。地球は約26,000年周期で歳差運動を繰り返し、自転軸が23.4°傾く影響により恒星や太陽の運行軌道を変化させる。また黄道傾斜角とは天の赤道と黄道がなす角度を指す。約41,000年周期で変化する黄道傾斜角は100年間に0.02°減少するため、年々太陽の出没範囲の振れ幅は狭まっている。
- 25) カシミール3Dが公開されたのは1994年、天体運行シミュレーションが可能なStella Navigatorで地形データから地平線や山の形が描画されたのは2006年、高解像度領域の広いGoogle Earth Proが無料配布されたのは2015年以降のことである。
- 26) 過去の天体現象を再現可能なStella Navigatorの導入には精度の確認が不可欠であった。そのため吉井理や国立天文台の研究チームが正確性を立証した2017年まで、その導入には慎重な姿勢がとられていた。
- 27) 縄文時代研究が天皇制に比較的抵触しづらい研究領域であることは兼ねてより指摘されている(溝口2010)。
- 28) 古墳時代前期には儒教思想や坐北朝南に基づく方位観念の存在が指摘されており、死者を北枕で寝かせる風習があったとされる。この素地が仏教の世界観の導入を促し、北と死の連関をより強固なものにしたのかもしれない。

引用文献

- 赤塚次郎 2014 「瀬波の東之宮古墳」『史跡東之宮古墳』423-429頁
- 赤塚次郎 2020 「東之宮古墳に親る二集団と東海六部族」『研究紀要』7, 8-20頁
- 天羽利夫 1986 「古墳にみる地域性」『図説発掘が語る日本史』5, 188-191頁
- 池淵俊一 1994 「島田黒谷Ⅲ遺跡」『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡』20-52頁
- 石野博信 1973 「三・四世紀の集団墓」『考古学研究』第20巻第2号, 49-64頁
- 岩崎卓也 1983 「古墳時代の信仰」『季刊考古学』第2号, 29-31頁
- 宇野隆夫 1988 「結語」『谷内16号古墳』74-81頁
- 大串菊太郎 1920 「津雲貝塚及国府石器時代遺跡に対する二三の私見」『民族と歴史』第3巻第4号, 1-34頁
- 大塚和義 1967 「縄文時代の葬制」『史苑』第27巻3号, 18-41頁
- 小倉勝男 2002 「縄文時代の天体」『縄文ランドスケープ』, 51-53頁
- 鏡山 猛 1942 「原始箱式棺の姿相(二・完)」『史淵』第27

- 号, 43-84頁
- 春日真実 1988「主体部」『谷内16号墳』40-44頁
- 片桐孝浩 2002「土壙墓・土器棺墓の主軸方位について」『橿  
端遺跡』171-181頁
- 亀山行雄 1994「郷境墳墓群 まとめ」『郷境墳墓群・前池内  
遺跡・後池内遺跡・黒住・雲山遺跡・甫崎天神山遺跡8』  
55-61頁
- 川口重一 1956「大湯町環状列石の配置」『郷土文化』第11卷  
第1号, 1-4頁
- 河野一隆 2022「九州から見た東日本の装飾古墳」『東日本の  
古墳壁画を考える 発表要旨』考古学研究会第57回東京例  
会, 19-20頁
- 清野謙次 1920a「備中國淺口郡大島村津雲貝塚人骨報告」  
『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第5冊, 29-63頁
- 清野謙次 1920b「肥後國宇土郡轟村字宮莊貝塚人骨報告」  
『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第5冊, 81-87頁
- 清野謙次 1946『日本民族生成論』
- 清野謙次 1949『古代人骨の研究に基づく日本人種論』
- 倉田 勇 1972「『民俗方位』の一考察」『天理大学学报』第24  
卷第2号, 49-68頁
- 甲元真之 1977「弥生時代の社会」『古代史発掘 四』87-98頁
- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類學雜  
誌』第38卷第1號, 25-47頁
- 兒玉作左衛門 1948『モヨロ貝塚』
- 兒玉作左衛門 1950「モヨロ貝塚人の埋葬に就て」『考古学雜  
誌』第36卷第4號, 22-24頁
- 後藤守一 1935「前方後円墳雜考」『歴史公論』第4卷第7號,  
25-44頁
- 小林達雄 1988「二項対立の世界観」『縄文人の道具』古代史  
復元3, 178-182頁
- 小林達雄 1993「縄文集団における二者の対立と合一性」『論  
苑考古学』121-144頁
- 小林行雄・近藤義郎 1964「古墳の変遷」『世界考古学体系』  
3, 11-50頁
- 近藤義郎編 1991『前方後円墳集成』
- 斎藤 忠 1953「古墳方位考」『考古學雜誌』第39卷第2號,  
34-40頁
- 斎藤 忠 1976「葬送儀礼」『現代のエスプリ』No.111, 5-17頁
- 佐々木長生 1988「埋葬状態からみた靈魂観」『三貫地貝塚』  
372-379頁
- 白川美冬 2022「景観史的観点からみた前方後方墳」『東海史  
学』第56号, 19-36頁
- 末永雅雄 1951「畿内地方の古墳立地」『考古學雜誌』第37卷  
第3號, 1-12頁
- 末永雅雄 1961『日本の古墳』
- 菅原康夫 2010「萩原1号墓・2号墓の主体部構造と諸問題」  
『萩原2号墓発掘調査報告書』51-61頁
- 杉井 健 2003「熊本地域における前期古墳の様相」『新宇土  
市史』通史編 第1卷 自然・原始, 453-465頁
- 鈴木正崇 1978「南西諸島に於ける方位観の研究」『人文地理』  
第30卷第6号, 61-74頁
- 大工原豊・関根真二 2001「中野谷松原遺跡」『安中市史』第  
4卷原始・古代中世資料編, 131-210頁
- 高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考  
古学研究』第20巻第2号, 7-24頁
- 滝沢 誠 2012「東日本における古墳時代の斜交埋葬施設」  
『先史学・考古学研究』第23号, 1-20頁
- 滝沢 誠 2020「古墳の立地と視認性」『世界と日本の考古  
学』六一書房, 333-345頁
- 田中 裕 1996「前方後円墳の規格と地域社会」『考古学雜  
誌』142-158頁
- 田中良之 1998「出自表示論批判」『日本考古学』第5巻第5  
号, 1-18頁
- 辻村純代 1983「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋  
葬」『季刊人類学』第14巻第2号, 52-83頁
- 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』  
第26巻第3号, 17-34頁
- 都出比呂志 1986「墳墓」『日本考古学』4, 218-267頁
- 内藤善史 2003「ジダガ鼻調査区の弥生時代墳墓群」『前内池  
遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡1』213-215頁
- 中山英司 1952「人骨」『文化財保護委員会埋蔵文化財発掘調  
査報告』126-144頁
- 西澤 明 2005「墓制からみた縄文集団」『地域と文化の考古  
学』1, 349-368頁
- 西 琢朗・百田博宜・藤森文明・北條芳隆 2003「関東地方  
の前方後円墳のデータベース化とその分析」『日本土木学会  
2003年度大会報告』657-658頁
- 長谷部言人 1920「石器時代の蹲葬に就て」『人類學雜誌』第  
35巻1號, 22-28頁
- 林 謙作 1977a「御殿山墳墓群ノ埋葬頭位ヲ論シ併セテあ  
いぬ族ノ世界観ニ及フ」『北方文化研究』第11号, 1-28頁
- 林 謙作 1977b「縄文期の葬制」『考古學雜誌』第63巻3号,  
1-36頁
- 林 謙作 1977c「縄文期の葬制」『考古學雜誌』第62巻4号,  
1-19頁
- 林 謙作 1980「東日本縄文期末墓制の変遷（予察）」『人類學  
雜誌』第88巻第3号, 269-284頁
- 原田大六 1966『實在した神話』
- 原田敏照・松山智弘 2000「社日古墳群の位置づけとその評  
価」『社日古墳12』54-65頁
- 春成秀爾 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学  
部学術紀要（史学篇）』第40号, 25-63頁
- 春成秀爾 1982「縄文社会論」『縄文文化の研究』第8巻,  
224-252頁
- 春成秀爾 2003『考古学者はどう生きたか』
- 福永伸哉 1990「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳』103-120頁
- 福永伸哉 2011「埋葬姿勢と埋葬配置」『墳墓構造と葬送祭  
祀』古墳時代の考古学3, 227-234頁
- 藤田 等 2005「総括」『古浦遺跡』355-373頁
- 藤本 強 1965「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』  
6, 15-30頁
- 藤本英夫 1963「北海道の墳墓についての若干の考察」『せい  
ゆう』1月号, 166-174頁
- 藤本英夫 1971『北の墓』
- 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考  
古学』205-229頁
- 北條芳隆 2003『東四国地方における前方後円墳成立過程の  
解明』

- 北條芳隆 2011「歴史の流れ：戦前」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学 1, 7-20頁
- 北條芳隆 2017『古墳の方位と太陽』
- 堀越正行 1991「貝の集落の埋葬」『史館』第23号, 1-24頁
- 水野義明 1978「『東西南北』」『明治大学教養論集』第113号, 89-112頁
- 溝口孝司 1995「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究」『日本考古学』第2巻第2号, 69-94頁
- 溝口孝司 2010「『縄文時代の位置』」『研究の行方』縄文時代の考古学12, 97-111頁
- 三宅宗悦 1940「日本石器時代の埋葬」『人類学・先史学講座』第15巻, 1-26頁
- 向坂鋼二 1962「埋葬」『塚塚遺跡 総括篇』50-66頁
- 森 幸彦 1988「人骨の埋葬状態について」『三貫地貝塚』338-352頁
- 柳沢兌衛 1999「大湯環状列石と二至二分の太陽」『東アジアの古代文化』第99号, 46-65頁
- 柳田康雄 2000『伊都国を掘る』
- 山田康弘 1994「縄文時代の経産婦の埋葬」『物質文化』第57号, 1-17頁
- 山田康弘 2003「埋葬頭位は社会組織を表すのか」『立命館大学考古学論集Ⅲ』341-366頁
- 山田康弘 2004「埋葬頭位と二至二分」『月刊考古学ジャーナル』No.513, 12-15頁
- 山田康弘 2010「古病理学的所見と縄文・弥生時代の埋葬属性との対応関係」『月刊考古学ジャーナル』No.606, 16-19頁
- 山内清男 1936「石器時代人の寿命」『ミネルヴァ』第1巻第2号, 89-92頁
- 八幡一郎 1940「日本先史人の信仰の問題(續々)」『人類学・先史学講座』第18巻, 31-47頁
- 吉水眞彦 1991「近江湖西地域南部における古式古墳の様相」『滋賀考古』第6号, 1-25頁
- 渡辺 誠 1969「亀が岡文化における埋葬形態をめぐる二三の問題」『北奥古代文化』第2号, 35-44頁
- Baratta, N. C., Magli, G. and Picotti, A. 2022. The Orientation of the Kofun Tombs. Remote Sensing 14, 377, pp.1-19. doi.org/10.3390/rs14020377
- Gowland, W. 1897. The Dolmens and Burial Mounds in Japan. Archaeologia 55-2, pp.4-20.
- Sago, T., Yamada, O. and Lyle, B. B. 1986. Archaeoastronomical Analysis of Oshoro Stone Circles in Hokkaido, Acta Humanistica et Scientifica Universitatis Sangio Kyotiensis : Natural Science Series Vol.15, pp.100-120.
- 分析使用資料** (文中で引用したものは除く)
- 赤塚次郎2001「墳丘墓と槽形木棺墓について」『川原遺跡』93-99頁, 赤塚次郎2003「猫島遺跡の墳墓と木棺墓」『猫島遺跡』195-199頁, 赤塚次郎2018「邪馬台国時代の東海の王 東之宮古墳」, 阿部恵・手塚均1986「埋葬人骨について」『田柄貝塚Ⅰ』409-417頁, 甘粕健1989「三王山古墳群の歴史的評価」『保内三王山古墳群』173-174頁, 天羽利夫・岡山真知子1982「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集1-38頁, 天羽利夫・岡山真知子・宮本敬子・高橋正則1984「長谷古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第15集1-37頁, 荒井啓汰2020「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後半期の埋葬行為」『考古学研究』第67巻第3号56-75頁, 池淵俊一1998「五反田古墳群の位置づけとその評価」『門生黒谷1遺跡・門生黒谷2遺跡・門生黒谷3遺跡』295-314頁, 石部正志2003「前方後円墳の方位について」『新世紀の考古学』343-352頁, 伊藤雅文1989「石川における前半期古墳小考」『大陸の考古学』Ⅱ, 109-128頁, 稲木章宏2012「房総半島西岸～上総を中心に」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』81-97頁, 宇垣匡雅1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第3号72-92頁, 宇垣匡雅1998「橋原古墳群 まとめ」『高下遺跡・浅川古墳群ほか・橋原古墳群・根岸古墳』119-120頁, 宇垣匡雅2001「吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位」『古代吉備』第23集82-91頁, 宇垣匡雅2004「吉備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造』60-79頁, 遠藤正夫・児玉大成2005「青森県小牧野遺跡」『縄文ランドスケープ』55-70頁, 大野憲司1994「虫内Ⅲ遺跡の埋葬区と墓群」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書17』183-188頁, 岡本勇1956「埋葬」『日本考古学講座』第3巻321-338頁, 小郷利幸2003「橋本塚古墳群について」『橋本塚古墳群』46-54頁, 置田雅昭2003「奈良盆地島南部の古墳」『大和の古墳Ⅰ』47-64頁, 小原貴樹2015「境矢石遺跡の弥生時代墳墓について」『境矢石遺跡Ⅴ』55-69頁, 片桐孝治2002「まとめ」『原間遺跡Ⅱ』165-173頁, 荻谷俊介2003「纏向遺跡の方格地割の可能性」『初期古墳と大和の考古学』300-311頁, 川部浩司2006「横立山経塚古墳の再評価」『香川考古』第10号25-45頁, 岸本一宏1998「竜山石製長持形石棺の特徴と埋葬方向」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻591-610頁, 岸本直文1988「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第71巻第6号154-175頁, 草原孝典1999「埋葬頭位からみた長坂古墳群」『長坂古墳群』40-49頁, 倉林眞砂斗1997「竪穴式石椁の特色と問題点」『日上天王山古墳』112-123頁, 蔵本晋司1995「香川県高松市三谷五市舟古墳の再検討」『香川考古』第4号75-89頁, 蔵本晋司2021「埋葬頭位」『湊山下古墳7』101-118頁, 栗林誠治2005「X V Ⅱ 東林院古墳群」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告本文編 第2分冊』853-891頁, 小玉準1983「検出された遺構, 遺物の検討」『平鹿遺跡』220-242頁, 児玉大成2002「小牧野遺跡」『縄文ランドスケープ』30-31頁, 後藤守一1934「上野岡白石稲荷山古墳発掘調査概報」『考古学雑誌』第42巻第1号17-30頁, 後藤守一・相川龍雄1936「群馬県多野郡平井村白石稲荷山古墳」第3輯97-127頁, 小林圭一2013「西海湖遺跡と西田遺跡の墓域群について」『年報 平成24年度』58-65頁, 小林隆幸1989「前期古墳の埋葬頭位」『保内三王山古墳群』126-129頁, 小林達雄1995「縄文時代の『自然の社会化』」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学 別冊 6, 73-81頁, 小林達雄1999「縄文ランドスケープ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』14, 1-16頁, 小林達雄1999「太陽の通る道」『天文学がわかる』アエラムック52, 86-89頁, 小林達雄2005「縄文ランドスケープ」『縄文ランドスケープ』9-19頁, 財団法人徳島県埋蔵文化財センター2005「X V Ⅲ 西山谷古墳群」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告本文編 第2分冊』895-955頁, 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1996「大星山古墳群・北平1号墳7」, 斎藤優1960「二体合葬例についての一仮説」『足羽山の古墳』85-89頁, 斎藤忠1961『日

本古墳の研究』、斎藤忠1987『東アジア葬・墓制の研究』、酒  
 詰伸男1962「本邦遠古の埋葬について」『文化史研究』14、  
 18-27頁、佐野一絵2002「秋田県伊勢壺」『縄文ランドスケ  
 ープ』36-37頁、澤谷昌英・田中正治郎1998「成果と課題」『篠  
 ノ井遺跡群・石川糸里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡  
 4』383-387頁、柴田英樹1994「甬崎天神山遺跡まとめ」『郷  
 境墳墓群・前池内遺跡・後池内遺跡・黒住・雲山遺跡・甬崎  
 天神山遺跡8』823-829頁、下江健太2002「米子平野における  
 古墳時代前期の小古墳群の検討」『古市遺跡群3』202-208頁、  
 白川美冬2022「埋葬施設と太陽」『考古天文学と奈良の景観』  
 1-10頁、菅沼圭介1988「弥生墓にみられる埋葬頭位方向」『史  
 学』第58号125頁、菅原康夫1983「考察編」『菰原墳墓群』徳  
 島県教育委員会84-99頁、鈴木一有1999「五ヶ山B2号墳の被  
 葬者像」『五ヶ山B2号墳』100-106頁、瀬川芳則1968「弥生  
 式時代の遺骸頭位について(1)」『考古学研究』第15巻第2号  
 76-78頁、大工原豊1995「群馬県天神原遺跡」『縄文時代にお  
 ける自然の社会化』季刊考古学別冊6 56-72頁、大工原豊2002  
 「群馬県中野谷松原遺跡」『縄文ランドスケープ』10-11頁、  
 大工原豊2002「群馬県野村遺跡」『縄文ランドスケープ』22-23  
 頁、大工原豊・林克彦1994「配石墓について」『中野谷地区遺  
 跡群』254-271頁、大工原豊・林克彦2001「天神原遺跡(後・  
 晩期)」『安中市史』第4巻255-266頁、高橋龍三郎1991「縄文  
 時代の葬制」『原始・古代日本の墓制』48-84頁、竹中信常1985  
 「北枕考」『宗教研究』第59巻第1号53-77頁、玉城一枝1985  
 「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米寿  
 記念献呈論集』261-280頁、千葉豊1993「配石墓小考(上)」  
 『伊那路』第37巻第11号481-486頁、千葉豊1993「配石墓小考  
 (下)」『伊那路』第37巻第12号523-531頁、辻村純代1988「古  
 墳時代の親族構造について」『考古学研究』第35巻第1号  
 89-108頁、都出比呂志1986「堅穴式石室の地域性的研究」、都  
 出比呂志1987「前方後円墳出現期の地域性」『埼玉考古』第23  
 号3-31頁、都出比呂志1988「前方後円墳起源論と秋月遺跡」  
 『求真能道』57-69頁、都出比呂志1989「古墳の誕生と終焉」  
 『古墳時代の王と民衆』古代史復元6、27-34頁、都出比呂志  
 1989「前方後円墳の誕生」『古代を考える古墳』1-35頁、都出  
 比呂志1995「祖霊祭の政治性」『日本古代の葬制と社会関係  
 の基礎的研究』9-24頁、都出比呂志2000『王陵の考古学』、都  
 出比呂志2005「前方後円墳と社会」、富樫泰時1995「秋田県大  
 湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊  
 6、30-41頁、中嶋友文2007「朝日山(1)遺跡の墓群と埋葬  
 頭位」『死と弔い』123-137頁、西澤明1994「縄文時代中期・  
 後期の墓址における区分原理」『東京考古』第12号37-59頁、  
 西田和浩2006「一国山3・4・5号墳について」『南坂8号  
 墳・一国山城跡・一国山古墳群』113-119頁、西田泰民1996  
 「死と縄文土器」『歴史発掘2』94-107頁、丹羽佑一1999「縄  
 文人の世界観(中期編)」『人類史研究』第11号107-116頁、乗  
 岡実1999「箱式石棺」『宗形神社古墳』20-22頁、橋本博文1986  
 「まとめ」『古海原前古墳群発掘調査概報』19-25頁、長谷部  
 言人1925「陸前大洞貝塚(發掘)調査所見」『人類学雑誌』第  
 40巻10号349-360頁、林克彦・細野千穂子1997「墓制からみた  
 地域性」『史友』第29号1-26頁、林謙作1998「階層社会とは何  
 か」『古代史の論点』第4巻88-110頁、春成秀爾1980「縄文合  
 葬論」『信濃』第32巻第4号1-35頁、平林彰1993「社会組織に  
 ついて」『北村遺跡11 本文編』513-521頁、廣瀬覚2005「壺形

埴輪の大型化とその背景」『将軍山古墳群Ⅰ』39-50頁、弘田  
 和司1996「畑ノ平古墳群 古墳群の変遷と年代」『西大沢古墳  
 群・畑ノ平古墳群・黒土中世墓・虫尾遺跡・茂平古墓・茂平  
 城』134-151頁、弘田和司2004「古墳時代後期以降の墓制につ  
 いて」『久田原遺跡/久田原古墳群2』653-656頁、福永伸哉  
 1992「近畿地方の小壜穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』  
 129-160頁、福永伸哉2004「交易の発展と赤坂今井墳丘墓」  
 『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告』132-142頁、藤本英夫1966  
 「北海道の墳墓の問題点」『幌倉沼の墳墓』143-145頁、藤本  
 英夫1972「埋葬頭位の方向性について」『北海道考古学』第8  
 輯33-37頁、藤本英夫1975「北海道の墓地」『墓地』155-176  
 頁、藤本英夫・河野本道・萩中美枝1972「日本列島北部の墳  
 墓の方位」『民族学研究』第37巻第2号146-147頁、古瀬清秀  
 1988「香川の前期古墳」『香川県史』第1巻458-465頁、古谷  
 毅1984「南関東地方の甲冑出土古墳の性格」『史学研究集録』  
 第9号20-45頁、北條芳隆1987「墳丘と方位からみた七つ塊1  
 号墳の位置」『七つ塊古墳群』95-109頁、北條芳隆1987「墳丘  
 の形態と方位からみた弥生墳丘墓と前方後円墳」『日本考古学  
 協会1987年度大会研究発表要旨』67-73頁、北條芳隆1990「古  
 墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』第37巻第  
 2号49-69頁、北條芳隆1992「弥生終末期の墳丘墓と前方後円  
 墳」『吉備の考古学的研究』上、455-482頁、北條芳隆2000「前  
 方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見直す』77-135頁、北條芳  
 隆2004「前方後円墳の終焉にかんする予察」『西日本における  
 前方後円墳消滅過程の比較研究』43-54頁、北條芳隆2004「前  
 方後円墳の築造と方位観念・社会的背景の復元にかんするデ  
 ータベースの活用」『人文科学とデータベース』43-52頁、北  
 條芳隆2009「第二の『大和』原風景」『日々の考古学』2、243-  
 262頁、北條芳隆2009「『大和』原風景の誕生」『死の機能 前  
 方後円墳とはなにか』29-100頁、北條芳隆2012「景観史にお  
 ける前方後円墳の時代」『東日本における前期古墳の立地・景  
 観・ネットワーク』1-13頁、北條芳隆2013「東の山と西の古  
 墳」『考古学研究』第59巻第4号26-46頁、北條芳隆2017「関  
 東地方への前方後円(方)墳の波及を考える」『三角縁神獸鏡  
 と3~4世紀の東松山』43-66頁、北條芳隆2017「古墳・火  
 山・太陽」『第四紀研究』第56巻第3号97-110頁、北條芳隆  
 2018「野本将軍塚古墳の立地と方位」『野本将軍塚古墳と東國  
 の前期古墳』35-44頁、北條芳隆2019「古事記と景観・天文考  
 古学」『古事記年報』第61号1-29頁、北條芳隆2019「駿河の古  
 墳と火山信仰」、北條芳隆2019「藤本英夫氏の業績とその再検  
 討」『天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構  
 築』1-3頁、北條芳隆2022「高千穂の峰と前方後円墳の祭り」  
 『神話の源流をたどる』131-161頁、北條芳隆2022「纏向古墳  
 群と周辺景観」『纏向学の最前線』185-194頁、堀越正行1994  
 「船橋市古作貝塚の埋葬」『史館』第25号1-22頁、松本彦七郎  
 1930「陸前國登米郡南方村青島介塚調査報告」『東北帝國大學  
 理学部地質學古生物學教室研究邦文報告』第9巻1-48頁、右  
 島和夫1998「埋葬頭位から見た東国古墳の地域性」『考古学論  
 集』上巻、693-717頁、三木弘2005「玉手山古墳群の墳頂部多  
 葬」『玉手山古墳群の研究V』119-145頁、三木文雄1986「前  
 方後円墳について」『那須駒形大塚』59-96頁、峰山巖1987「考  
 察」『高砂貝塚』42-48頁、宮尾亨2002「環状列石の縄文ラン  
 ドスケープ」『縄文ランドスケープ』51-53頁、三宅博士・広  
 江耕史・赤沢秀則1985「小結」『奥才古墳群』169-180頁、宮

澤公雄1999「甲斐の積石塚」『東国の積石塚古墳』3-23頁、武蔵美和1991「基底部構造から見た蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳の評価」『徳島県埋蔵文化財センター年報』vol.2, 101-104頁、茂木雅博1986「箱式石棺考」『山陰考古学の諸問題』97-111頁、柳沢一男1988「福岡県の古墳時代」『福岡県地域史研究』8, 13-29頁、山田康弘1997「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第4巻第4号1-39頁、山田康弘2007「縄文時代の葬制」『死と弔い』3-17頁、山田康弘2008『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』、山田康弘2008「骨と人骨」『集落からよむ弥生社会』112-130頁、山田康弘2014「山陰地方における弥生時代前期の墓地構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集111-137頁、横田明日香2006「讃岐における舟形石棺の様

相」『香川考古』第10号1-11頁、吉井理2009「関東地方における前方後円墳の墳丘方位について」『日々の考古学』213-227頁、渡辺貞幸1999「まとめと若干の考察」『荒島古墳群発掘調査報告書』80-94頁、Hojo, Y. 2022. A Primitive Calendar Used by Prehistoric Farmers in Japan. Research Papers of the Anthropological Institute Vol.11, pp.77-85, Nakamura, T. 2022. Astronomy and the Kofun burial mounds of Japan. Journal of Astronomical History and Heritage Vo.25 No.2, pp.208-212.

紙幅の都合上、引用文献の副題、発行所、報告書のシリーズ名、番号は省略した。

(〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4丁目1番1号 東海大学3号館考古学第1研究室)

【2023年9月9日受理】

## The present state and future of burial orientation research

SHIRAKAWA Mifuyu

**Abstract:** The volume of research and the fragmentation of study areas within the field of burial orientation research has made a systematic understanding of the field's history an issue for many years. In this paper, the author reviews the literature on pre-historic (Jōmon to Kofun period) burial orientation and examines issues faced by the field. As a result, the author recognizes that the field needs to introduce a diachronic perspective and is lacking in the use of objective evidence in landscape analyses. Future research needs to reconsider the norms and values regarding burial orientation that existed in the past by utilizing ethnographic analogy and a diachronic understanding of the interactions between humans, their landscapes, and the natural environment.

**Keywords:** Prehistory, Protohistory; literature review; burial; funerary customs; orientation